

自閉スペクトラム症児における不安と注意バイアスの関連

高橋 七海

【序論】自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; ASD)児は定型発達児よりも不安が高く(van Steensel & Heeman, 2017), ASD の中核症状に加えて, 様々な精神疾患, 特に不安障害の併発率が高いことが報告されている(Simonoff et al., 2008; van Steensel, Bögels, & Perrin, 2011)。特に思春期には, 対人関係の複雑化や様々な心理的負荷から, 不安障害など多様な精神的症状が出現しやすい(内山・江場, 2004)ことから, 思春期年齢における ASD 児の不安のメカニズムの検討が求められる。一方でこれまで, 一般集団内では, 不安には脅威への注意バイアスが関連していることが様々な研究から明らかにされており, 不安の高い人は, ネガティブな言葉や表情, ヘビの画像といった脅威関連の情報に対して特に敏感であることが報告されている(Bar-Haim, Lamy, Pergamin, Bakermans-Kranenburg, & van IJzendoorn, 2007)。近年では, アイトラッカーを用いて実際の視線行動を測定し, 注意バイアスを調べるアイトラッキング研究が行われ, 不安の高い大人および子どもは, 初め脅威関連の情報へ注意を向けるが, その後脅威から注意を逸らす傾向がみられた(Armstrong & Olatunji, 2012; Shechner et al., 2013)。一方で, ASD 児を対象にアイトラッカーを用いて実際の視線行動を測定し, 不安と脅威への注意バイアスの関連を調べた研究はほとんどなく, ドット・プローブ課題や視覚探索課題を用いて ASD 児における不安と脅威への注意バイアスの関連を調べた研究も結果は一貫していない。ASD 児を対象とした先行研究による見解が不一致である要因として, 研究に用いた刺激の違いが結果に影響を与えた可能性が考えられた。そこで本研究では, 刺激の種類という要因が ASD 児の注意バイアスに与える影響について検討するために, 物刺激と表情刺激の 2 つの刺激を用いた。そして ASD 児を対象に, アイトラッカーを用いて, 実際の視線行動の特徴を調べ, 不安と注意バイアスの関連を TD 児と比較・検討した。

【方法】研究参加児は, 小学校 3 年生から中学校 3 年生までの TD 児 18 名と ASD 児 8 名であった。研究参加児本人に SCAS スペンス児童用不安尺度への回答を求め, 不安の程度を測定した。その後, 注意バイアスを測定するために, 実験室で free-viewing 課題を行った。児は, 画面から 60cm のところへ座り, 画面に表示される画像を自由に見るよう求められた。画面には, 中央に十字型の注視点が 1 秒間提示された後, 脅威×ニュートラル, 脅威×ポジティブ, ポジティブ×ニュートラルのいずれかの組み合わせの画像が 5 秒間提示された。この試行を物刺激と表情刺激の双方で行い, 児の視線行動を測定・記録した。その後, TD 群と ASD 群の不安の程度を比較するために, SCAS 各得点について対応のない t 検定を行った。また, 不安と注意バイアスの関連について検討するために, 各刺激への注視時間の割合, 各刺激へ先に注意を向けた割合, 各刺激へ初めて視線を向けた際の注意の持続時間を算出し, SCAS 各得点との相関分析を行った。

【結果と考察】分析の結果, TD 群においては, 不安と注意バイアスとの間に有意な相関はほとんど見られなかったが, 不安が高いと脅威刺激へ先に注意を向ける傾向が部分的に見られた。また, 不安が高いと脅威刺激への合計注視時間が短い傾向が見られた。一方で, ASD 群においては, 物刺激を用いた場合においても表情刺激を用いた場合においても, 不安と注意バイアスの間に関連がみられなかった。本研究および近年のいくつかの研究は, ASD 児の不安の高さに脅威への注意バイアスが関連していない可能性があることを示唆しており(Hollocks, Ozsivadjian, Matthews, Howlin, & Simonoff, 2013; May, Cornish, & Rinehart, 2015), 異なるメカニズムが不安の高さに関連していることが考えられる。今後更なる検討により, ASD 児の不安のメカニズムを明らかにしていくことが求められる。(比較発達心理学)